

## 書評

### 平岡昭利編『地図で読み解く日本の地域変貌』

B5判, 333 ページ, 2008 年 11 月刊, 海青社, 3,048 円 (税別).

本書は、全国各地の計 111 の地域の変貌が、地図を用いて解説されている。各地域をフィールドとする 86 人の研究者により執筆され、内容が充実しているだけでなく形式も統一されており、何よりもこれほど多くの第一線の研究者の執筆を 1 冊にまとめあげた専門書は非常に少なく、編者の力量が伺える。

次に、本書の構成は下記の通りである。

編者・執筆者一覧

はじめに

目次

索引

本文

ここで、本書に取り上げられた 111 の地域を、地方ごとに列挙する。

- ・北海道 11 地域 (札幌, 函館, 苫小牧, 室蘭, 余市, 旭川, 富良野, 稚内, 帯広, 釧路, 標茶)
- ・東北 11 地域 (仙台, 盛岡, 青森, 八戸, 秋田, 八郎潟干拓地, 山形, 酒田, 福島, 郡山, いわき (小名浜))
- ・関東 22 地域 (東京, 八王子, 多摩ニュータウン, 横浜, 川崎, 相模原, 横須賀, 三宅島, 千葉, 浦安, 松戸, 九十九里浜, さいたま, 川口, 水戸, つくば, 石岡, 日立, 鹿島臨海工業地域, 宇都宮, 前橋, 高崎)
- ・中部 19 地域 (名古屋, 一宮, 豊田, 豊橋, 岐阜, 浜松, 静岡, 甲府, 長野, 岡谷, 軽井沢, 新潟, 長岡, 富山, 高岡, 黒部川扇状地, 砺波平野, 金沢, 福井)
- ・近畿 16 地域 (大阪, 堺, 大和川, 東大阪・大東, 千里丘陵, 枚方, 神戸, 西宮, 姫路, 京都, 大津, 奈良, 天理, 和歌山, 津, 四日市)
- ・中国・四国 16 地域 (広島, 呉, 福山, 岡山, 児島湾干拓地, 倉敷, 水島工業地帯, 山口, 下

関, 鳥取, 松江, 高松, 徳島, 鳴門, 松山, 高知)・九州 16 地域 (福岡, 北九州, 久留米, 佐賀, 有明海, 長崎, 佐世保, 大分, 熊本, 宮崎, 鹿児島, 桜島, 那覇, 沖縄, 与勝諸島, 南大東島)

上記のように, 47 都道府県庁所在地に加え, 「多摩ニュータウン」「つくば」「千里丘陵」などの都市化された地域から, 「八郎潟干拓地」「児島湾干拓地」などの干拓地, さらに「三宅島」「与勝諸島」「南大東島」などの島嶼に至るまで, 特色のある地域を網羅している。

編者が「はじめに」で, 「古い地形図と現在の地形図を比較することにより, 我々が住んでいる地域が, どのように変貌してきたのかを視覚的にとらえようとするのが本書の狙い」と述べているように, 本書の特色として, 紙面の約 70% を地図が占め, 基本的に見開き 2 ページ (東京, 大阪は 8 ページのほか 6, 4 ページの地域もある) で新旧の地形図が掲載され, 一目で比較することが可能である。さらに, 読図だけでなく地域ごとに説明文がコンパクトにまとめられ, 日本地誌の教材としても活用できる。多くの地域で, 埋め立て等による陸地の拡大, 市街地の整備・拡大, 鉄道や道路の整備などが見られ, 都市の中心部の移動や架橋による変貌なども地形図上から読み取れる。

次に, これらの特色が顕著に見られる地域を簡単に取り上げる。「室蘭」では, 埋め立てによる陸地の拡大, さらに 1998 年に白鳥大橋が開通したことにより, 市役所等がある室蘭駅方面へ, それまで東室蘭側からしか通行できなかったが, 二方面から通行可能となり都市機能が大きく変化した様子などを見ることが出来る。また, 「八郎潟干拓地」では, 干拓, 入植, 大規模農業, 集約された大潟村の市街地などが地図および説明文から読み取れる。さらに, 「浦安」は, 埋め立てにより陸地面積が最も拡大した地域の一つで, 約 100 年前の地形図からは想像できないほど著しい変貌を遂げている。交通網の整備, 東京ディズニーランド, 東京ディズニーシーの開園や, リゾートホテルの建設が相次いでいる。「神戸」では, 埋め立てによる陸地の拡大, ポートアイランド, 六甲アイランドの整備や架橋, 都市交通や空港等の交

通網の整備がはっきりと読み取れる。

また、沖縄県では特に地形図上から読み取れる地域の変貌が随所に見られ、その一つの「沖縄」では、埋め立てや道路網の整備だけでなく、米軍基地によって接収されたままの集落「大工廻」なども紹介され、基地問題に揺れる沖縄の実像を浮かび上がらせている。また、「与勝諸島」は、巨大石油備蓄基地建設との引き換えに平安座島・沖縄本島間で架橋が行われ、続いて埋め立てにより平安座島と陸続きになった宮城島から伊計島まで、さらに平安座島から浜比嘉島まで架橋が行われた。解説の中で、架橋による便利さに加え一時的であっても人口流入や観光地化が見られた反面、環境の悪化や、島のコミュニティーの弱体化など、架橋が地域に与える負の部分についても指摘している。最後に、「南大東島」は、1917年当時は3つの集村があったが、現在集落は「在所」の1カ所のみである。大規模サトウキビ栽培が行われている南大東島において、労働力の効率化を図った散村形態となっているのが興味深い。空港、港湾、道路の整備などだけでなく、集落形態の変化が地形図上から容易に見て取れる。

なお、本書は、7ページにわたりキーワードが掲載され、地域ごとにとらえるだけでなく、キーワードから地域をとらえることも可能である。日本の特色ある地域について、地図と説明文で紹介し、さらにキーワード検索が可能な本書は画期的な専門書で、考える地理学を推奨する書籍として多方面から活用が可能である。（堀本 雅章）

## 中村周作著『宮崎だれやみ論 酒と肴の文化地理』

A5判, 141ページ, 2009年4月刊, 鉾脈社,  
1,890円(税込)。

今日の食生活においては、食の平均(画一)化や洋食化の進行がみられ、地域の食文化の継承が危惧されることも多い。一方で、食の地域差の存在は多くの人々が実感もしてきたし、経験的に語られ、その多様さは魅力とも捉えられてきた。グルメ・旅行番組や「秘密のケンミンSHOW」のような情報ソースの人気や、地産地消や地域ブラ

ンド化商品への注目などからも、人々の「食」への関心とその傾向が垣間見られる。郷土料理を収録したものや様々な食物の普及の歴史を整理した書籍類のように、食文化の記録をまとめ、伝承する試みは従前から多い。しかし現状では、それらの空間的な広がりや詳細に、学術的に検証した成果は比較的少ない。特に、魚食や飲酒の嗜好の県内レベルでの地域差の考察は、まとまった成果がなかった。

この状況にあって、著者は宮崎県を舞台に、伝統的な食の地域性を紐とくことを試みた。本書は、地域(の食)がもつ特徴や魅力の再発見と、それらを知ることによって地域住民の自信と活力を回復させて地域文化の継承、発展をサポートすることに努めた(本書, 14p)興味深い一作である。自らの生活に直結した食生活や地域を見つめ、そこにある特徴や知恵と生み出された背景を知ることが、自分の軸や生きる基盤を意識し、振り返る機会にもなる。本書では、食事、食材のうち、「だれやみ」に欠かせない酒類と魚料理が取り上げられている。「だれやみ」とは、「一日の疲れ(だれ)・仕事を終える(やめ)憩いの一時」(つまり、晩酌)である。家庭内では「お父さんの晩酌」は肩身の狭い存在かもしれないが…著者は、疲れを癒すと同時に神に近づくハレの機会でもある晩酌、そこに用いられる酒と肴の食のセットこそ、地域の究極の食文化であると評している。

以下、本書の構成に沿って、内容を紹介していこう。

第1章〈地理学と地域文化〉では、地域の(食)文化をみつめる動機や意義と、その場への地理学の貢献の可能性について整理をし、研究の目的や方法を確認している。

第2～5章が、具体的な報告の場である。まず第2章〈飲酒嗜好にみる宮崎県域の地域性〉では、宮崎県でみられる飲酒嗜好について、全国的にみた場合の位置づけ(第2節)、県内での嗜好の地域性の洗い出し(第3節)、県内の飲酒嗜好の地域差とその形成過程の考察(第4節)に取り組まれている。著者らは、県内の酒小売店91軒への調査から販売状況を把握し、各地での酒類の生産・流通の歴史の変遷を振り返ることで、飲酒